拝金思想と人間の本性

金銭欲は誰にもありますが、拝金思想が人間の本性であるかとなるとそれは疑問です。

「子供が『バラ色の煉瓦の、窓に花があって、屋根にハトがいるきれいな家があったよ』といっても、大人にはそれが想像できない。『10万フランの家を見たよ』というとようやく、『そりゃすごい家だね』と感心するのだ」（星の王子さま）

この寓話によれば、大人も勿論きれいな家を求めているのですが、頭の中はそれを取得する手段のことで一杯なのです。大人が危険なのはやがてその手段だけを追求するようになるからでしょう。

金儲けという本来手段にすぎないものが、自己目的になってしまったのが拝金思想です。

金融工学は、金融発展のために、卓抜した日本の数学者やノーベル経済学受賞者などが関与してつくりあげられた、完璧なテクノロジーでした。

しかしその方法は、社会から切り離されてそれ自身が目的化して増殖するものであったため、社会にとってのガン細胞となり、やがて社会の土壌から吸いとるものが枯渇して自滅しました。

テクノロジーは限られた範囲の原理を究明するものですから、そこには限界があることを念頭におくべきです。

人間には、合理的思考力だけでなく、常識や感性というものもあります。人間は誰でも根底に、共同体の成員であるという心情をもっているということは確かなことでしょう。私たちの希望の拠はそこです。

タイム・イズ・マネーの国でオバマ次期大統領が勝利した重要な要素は、彼が貧しさや苦しみにさらされている人々の気持ちを理解する感性をもっていたことであったと評価されています。

日本人の倫理意識も歴史的には相当高い水準にあったようです。例えば「情けは人の為ならず」という言葉が鎌倉、室町時代には、すでにいくつかの文献に登場しています。今でも上演されている能の謡いにつぎの文句があります。「世の中の情けは人の為ならず、われ人のため辛ければ必ずその身にむくいあり」。

どんな強大な勢力に対しても、社会はさらに強力です。そして絶大な権力も非情であればついには社会の力には打ち負かされるというのが歴史の教えでもあります。日本ではこうした教訓が民衆道徳となって根づいてきていました。

御参集の皆様は、企業や団体の社会的責任の履践を掲げて、国内はもとより中国などにも赴いて、経験の紹介や講演を行い、また著作を出版するなど先進的な役割を果たしてこられました。当センターもこのＣＳＲこそが、現代の道義復興の牽引車であり、そうした活動を行うところは必ず栄え、社会の頼り所になると考えます。高い技術力や資金力に加えて、こうした倫理的精神が広まって社会的力となるとき、日本は世界で指導的立場に立てるのだと思います。

（2009.1.13 社団法人 くらしのリサーチセンター 賀詞交換会あいさつ）